

論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	賈文夢
題名	<p style="text-align: center;">近世の「疱瘡墓」に関する学際的研究 一大村・五島・天草における「無痘地」の実態について</p>		
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究は近世の疱瘡墓など石造物を通じて大村・五島・天草における「無痘地」の実態について明らかにすることを目的としている。</p> <p>疱瘡は致死率高い感染症である。江戸時代の日本で疱瘡は毎年のように流行する常在伝染病である（酒井 2002 : 155）。人口密度が高い都市部では、疱瘡は避けられない病となっていた。多くは子供の頃発症し、抗体を保持して一生罹ることがない特徴を持つ。しかし、小児が抗体を保持した家族に囲まれ、小児への伝染が抑えられる期間は限られており、世代が変わり、大人の抗体保持者が減少すると、また小児だけでなく大人も巻き込んで爆発的な流行が起こることが繰り返された（相川 2018 : 19）。一方、疱瘡が流行しないとされていた土地もあった。このような土地は無痘地と呼ばれる。しかし、無痘地といっても疱瘡患者が存在しないわけではなかった。その証拠に大村・五島・天草には疱瘡に関わる多くの石造物が残っている。本研究の主テーマである疱瘡墓もその一つである。つまり、天然痘患者が存在しなかったのではなく、徹底した隔離政策によって、天然痘ウイルスのない空間を作り上げようとしていたのである。</p> <p>そして、疱瘡墓は、その隔離政策によって生み出された墓である。感染したら、人里離れた土地に隔離され、死後も隔離されたまま、その近くに葬られた。隔離されて忌避されたため、疱瘡墓に関する情報はとても少なく、その多くが正確な位置すらわかっていない。</p> <p>そこで、本研究では、まず文献史料や聞き取り調査から疱瘡墓などの疱瘡関連石造物の情報を集めて、現地調査を行った。そして、発見した墓地の中の疱瘡墓の銘、形、立地、分布範囲、数などを調査し、基礎資料を集めて、データベースを作成した。それから、疱瘡墓や地域の比較研究を行い、物質資料と文献史料や民俗学の成果を合わせて、地域的な特徴を検討して、その意味を考えることにした。最後にこれらのデータから無痘地の実態を分析した。</p> <p>実際に長崎県で 17 ヶ所、熊本県天草地方で 3 ヶ所、合計 20 ヶ所の疱瘡墓を確認することができた。無痘地であっても疱瘡によって亡くなった人の墓が数多く存在することがわかった。大村で確認されている疱瘡墓だけでもおそらく 1000 基以上の墓がある。</p> <p>これらの調査を通じて、3 つの結論を得た。①疱瘡墓には地域性と多様性が存在する。これらの地域性と多様性は当時の政策が反映されており、言い換えれば、疱瘡墓の地域性と多様性から疱瘡対策の違いを知ることができる。②疱瘡墓と潜伏キリシタン墓は地理的に近い場合が多い。潜伏キリシタンの移住によって大村藩から多くの農民が五島にわたっ</p>			

てきたが（内藤 1979：24）。移住先として離島や山間地、藩境といった条件が不利な土地を選ぶことになった（叶堂 2018：3）。疱瘡の隔離地はもともと集落から離れた辺鄙な場所であるため、先住者との大きな摩擦もなく入植することもできたと考えられる。そのため、五島では疱瘡墓と潜伏キリシタン墓が隣接していることも少なくない。③疱瘡墓の数と分布をみると、無痘地は決して疱瘡が流行しない土地ではなかったと考える。実際には疱瘡が流行して多くの人が感染して亡くなっている。「無痘地」政策は多くの犠牲の上に成り立っていると考える。そして、無痘地以外の場所では、疱瘡は子供の病気とされていたが、「無痘地」の疱瘡墓の多くは大人が感染して亡くなった墓であった。無痘地の大人は免疫を持っていないため、多くの大人が感染している。しかも子どもよりも死亡率が高かったため、多くの者が亡くなっている。大人の犠牲は労働力の損失に繋がり、社会的な危機が発生する可能性があったと考える。

感染症への対応は普遍的なテーマであり、現在でも新型コロナウイルスなどの感染症の社会問題は存在する。「ゼロコロナ」政策と「無痘地」政策は、時代は異なるが、有効的治療法が政策の成否を決める点や、政策に限界があることも共通である。また、感染症からの差別や隔離などは現代にも通じるテーマである。疱瘡と疱瘡対策は江戸時代のことであるが、現代にも通じるテーマである。

氏名

賈文夢

本研究意旨通过近代天花墓之类的石造物揭示称为「无痘地」的大村・五島・天草的实际状态。

天花是致死率很高的感染病。天花在江户时代的日本被看作是每年都会流行的常在病。都市地区的人口密度高，天花就成为了无法规避的病毒了。多数是在幼年发病，这样就能保证一生不再受天花病毒威胁。流行形式也被限定为在儿童被携带抗体的家庭成员包围的时期，传播给儿童的情况得到控制。随着几代人的变化，携带抗体的成年人数量减少，天花病再次爆发，儿童和成年人都有感染的可能性，并且形成一个重复的循环。一方面，有些地区不流行天花。这样的地方被称为无痘地。但是，无痘地也并不是没有天花患者的。大村・五島・天草存在的大量天花相关石造物就是有力证据。本研究的主要研究对象天花墓就是其中之一。也就是说并不是不存在天花患者而是由于彻底隔离政策的原因，形成了一个没有天花病毒的空间。

天花墓就是这个隔离政策下所衍生出来的墓。一旦感染就会被隔离在远离人烟的地方，死后也被埋葬在没有人烟的地方。因为被隔离和差别对待所以天花墓相关的情报很少。甚至于不知道天花墓准确的位置。

本研究就从文献资料和走访调查开始，收集天花墓和相关石造物的情报并进行实地考察。之后对所发现的天花墓进行墓志铭・墓形状・所在地・分布范围・数量等调查统计，收集基础资料，作成基础资料。之后，对天花墓进行地域比较研究。物质资料和文献史料・民俗成果相结合，讨论地域性的特征并且思考其意义。最后通过这些数据分析无痘地的真实状态。

调查在长崎县的 17 个地区、熊本县天草地方的 3 个地区，共计 20 个地区发现确认了天花墓。虽然被称为无痘地但还是发现了很多天花墓。只在大村确认的天花墓恐怕就有 1000 墓以上。

通过这些调查得出三点结论。①天花墓存在地域性和多样性。这些地域性和多样性可以反映出当时所实行的政策。简而言之，从天花墓的地域性和多样性就可以知道实施了不同的防疫政策。②天花墓和潜伏基督教墓经常出现在同一个地方。由于潜伏基督教的移居，大村藩的很多农民移住到了五島。移居地多数是离島・山间或者藩界之类的条件不利的地方。天花的隔离地也多是在远离聚落的偏僻地方。移住到天花的隔离地可以减少跟当地岛民产生冲突的概率。所以五島的天花墓经常和潜伏基督教墓距离很近。③从天花墓的数量和分布看无痘地并不是代表天花不流行。事实上天花流行的时候有大量的人感染去世。无痘地政策是建立在多数人的牺牲之上的。同时，无痘地以外的地区，天花作为幼儿病，流行时对幼儿有影响。但是根据调查结果，在无痘地发现的墓碑多是因成人感染而死亡的。天花流行时，无痘地的成人因不具有抗体多数感染。并且一旦感染病情比幼儿期严重导致更多人死亡。成人死亡导致大量的劳动力丧失，严重的有可能会带来社会性的危机。

天花、天花防控虽然是江户时期的事情，但是现代的新型冠状病毒之类的传染病也可能引发社会性问题。新冠病毒零感染政策和无痘地政策虽然所处的时代不同，但是有效的治疗方法都会决定着政策的成功与否，不管在什么时代政策也都其局限性所在。从传染病引发的隔离和差别对待等问题在如今社会也同样存在。